

『惠慶法師集』比良歌群試注

福田 智子、黒木 香、竹田 正幸
田坂 憲二、南里 一郎、西原 一江

惠慶法師は、中古三十六歌仙にも数えられている、十世紀を代表する歌僧である。本稿では、『惠慶法師集』所載、比良歌群（一〇九～一一八番）十首について、注釈を施す。

凡例

- 一、本稿は、『惠慶法師集』に収められた「あふみに、ひらといふところに、十月はかりにくたりて、題ともいたして」という詞書から始まる九首の歌と、それに続く「おなしたひ……」の詞書をもつ一首の計十首について、注釈を加えるものである。『新編国歌大観』所収の『惠慶法師集』では、一一七～一二六番にあたる。
- 二、歌番号 注釈のはじめに、『惠慶法師集』の通し番号（『私家集大成』中古I所収「惠慶集」の歌番号と一致）を示す。
- 三、本文 底本は、冷泉家時雨亭叢書第六十七卷『資経本私家集三』（二〇〇三年十二月刊）所収、資経本惠慶集とする。漢字仮名の区別、
- 仮名遣い、おどり字も底本のままとし、濁点も付さない。
- 四、校異 熊本守雄氏『惠慶集校本と研究』（桜楓社、昭和五十三年三月刊）に収められた以下の影印本を用い、語の異なりのほか、表記の違
- いも示す。
- 書陵部一五〇・五五八本 略称（書古）
- 書陵部五〇一・四〇一本 略称（書流）
- 五、語釈 見出し語は、底本の表記のまま掲げる。ただし、歴史的仮名遣いに改めたり、濁点を付したりする必要のある場合には、見出し語の次に（ ）を付けて示す。
- 六、別出 歌集の正式名称（『新編国歌大観』の目次に拠る）、巻数、部立、歌番号、歌題、詞書、詠者名、歌、左注を、順に示す。

七、考察 考察中での和歌の引用形式は、原則として、「和歌本文」（歌集名・部立・歌番号・詠者名・詞書）とする。なお、『万葉集』の番号は、旧・新の順で表記する。

注釈

一〇九

【本文】

あふみに、ひらといふところに、十月はかりにくたりて、題ともいたして

山水に紅葉なかる

からにしきあはなるいによりければ山みつにこそみたるへらなれ

【校異】 ○十月はかりにくたりて一人くまかりて（書流） ○題ともいたして

たして―たいともいたしてうたよみ待るに（書流） ○山水に紅葉なかる―山かはのみち（書流） ○山みつにこそ―やま水にこそ（書流）

【通釈】

近江国に、比良という所に、十月頃に下向して、題などを出して

山川に紅葉が流れる

唐錦は、細く頼りない糸に縫ったので、山川の水に乱れているようだ。

【語釈】 ○あふみ 近江。国名。現在の滋賀県。淡水湖である琵琶湖に由来する地名。 ○ひら 比良。地名。名所名。近江国志賀郡比良村を中心とする地。現在の滋賀県滋賀郡志賀町大字木戸から北へ、南比良、北比良、南小松、北小松にかけての地。湖西の景勝地で、背後に雄大な比良山を控え、後世にいう近江八景の一つに「比良暮雪」がある。 ○

からにしき 唐錦。唐織りの錦。大和錦に対する言葉。和歌では多く紅葉の比喩として用いられる。 ○あはなるいと「淡なる」は、はかなく消えやすいさまをいう。「あはに」の形で用いられることが多い。糸や紐と関連して用いたものには、「かはごほりあはにむすべるひもなればかざすひかげにゆはふなるべし」（枕草子・宮の五節出ださせたまふに・一二）がある。川村晃生氏・松本真奈美氏『惠慶集注釈』（貴重本刊行会、平成十八年十一月。以下『注釈』と略す。）は「あわなる糸」という本文を立て、「泡でできた糸」とする。当該箇所を表記は、熊本守雄氏『惠慶集校本と研究』（桜楓社、昭和五十三年三月。以下、『校本と研究』と略す。）に拠っても、『惠慶集』諸本一様に「あはなるいと」であることから、本稿では、「あは（淡）」を本文に立て、ハ行転呼音による「泡（あわ）」は、「山みづ」との縁語とみた。 ○へらなれ（べらなれ） 推量。現在不確かであることについて、事態や理由を推量したり想像したりする。……のようだ。……しそうだ。……らしい。「べらなり」は古今集時代に例が集中し、とくに貫之詠に多いことが知られる（↓一二二番参照）。

【別出】なし

【考察】

当該歌から、一一八番歌までは、某年十月に、惠慶が近江の比良に行った折に詠じた一群の和歌である。『校本と研究』は、『安法法師集』二七番から三二番までの歌群が、「神な月ばかりに、ひだ（ら）の誤りか）へいきけるに」「ひらにいきて」という詞書をもち、『惠慶集』と共通する題材で詠じていることから、惠慶と安法がこの時同道していた可能性を推測している。以下、『安法法師集』を引用する。

神な月ばかりに、ひだへいきけるにこしのを山をみるに、
紅葉のなかりければ、かれこれしてよめる

こしののをやまの紅葉のまだしきはほかよりしぐれくるまなりけり
(二七)

ひらにいきてつけるほどに、山に白雲のかかりたりけるをみて
ちはやぶるひらのみやまのみぢ葉にゆふかけわたすけさのしら雲
(二八)

つなでひきつつゆくをみて

しら浪ののどけからねばしづのをつなでいそげるふねもゆきかふ
(二九)

山川よりもみぢのながるるをみて

山川の水かさまさる紅葉ははみなかみにこそあめとみゆらめ
(三〇)

ねざめにしかのなくをききて

紅葉ふるこの下かぜに夢さめてうらなき鹿の音をもきくかな
(三一)

しぐれのふるに、もみぢのちりまがひけるをみて

おほぞらに木ずゑや心あはすらんしぐれとともにこのはふりしく
(三二)

恵慶の当該歌と共通する歌題に基づいた安法の歌は、右の三〇番である。『恵慶集』の「題どもいだして」という記述に拠れば、恵慶や安法ら、何人かが同じ歌題で詠んだと考えられる。

さて、「からにしき」という語は、「ながれくる紅葉ばみればから錦たきの糸しておれるなりけり」(貫之集・一〇三)、「などさらにあきかと

とはむからにしきたつたの山のみぢちるよを」(忠安集・一〇)など、古今集撰者の時代から多く使われているが、恵慶自身も、当該歌以外に、「からにしきおりつむみねのむらもみち見そむるけふはあからめもせず」(恵慶集・九三)もみちをはしめてみるころ、「そめ人はつゆとき、しをからにしきみねのあさきりおれたつらん」(恵慶集・二二二・秋)などの用例がある。

「からにしき」と「いと」を詠んだ例としては、「流れくるもみぢ葉見ればからにしき滝のいともておれるなりけり」(拾遺集・冬・二二二)・つらゆき・延喜御時女四のみこの家の屏風に)や、「からにしき霜をばたてとたのめども時雨の糸のなほよわきかな」(堀河百首・八五〇・匡房・紅葉)がある。恵慶にも、「こむらさきやなきのいによりませてはなのにしきはわかやとのもの」(恵慶集・三・三月やなきふち侍いゑに女ともおりてあそふ)の詠がある。

第二句の「あはなるいと」であるが、類例としては、「春くれば滝のしらいといかなれやむすべども猶あわに見ゆらん」(拾遺集・雑春・一〇〇四・紀貫之・延喜十五年齋院屏風歌)、「あわなりしたきのしらいと冬くればとくべくもあらずこほりむすべり」(好忠集・三四〇・くれの冬／十二月はじめ)や、「山たかみおちくるたきのしらいとはあはによりてぞみだれそめける」(重之集・三七)が挙げられよう。

結句末を「……べらなれ」とする例は、『恵慶集』に、合計三首ある。「水鳥のながるる河の山吹は影をのみこそいとふべらなれ」(書陵部蔵本〈五〇一・四〇一〉恵慶集・三〇)・うちの三尺御屏風の歌／甲帖／やり水のつらに、山吹おほくさけり、水鳥あそぶ)のほか、この比良歌群中、「さしのほとりのきく」の題で詠んだ一二番である。同じ場での詠歌

に二首見えることが注目される。

当該歌と同じように結句末を「……べらなれ」とする例は、初出と見られる「はるのきるかすみの衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ」(古今集・春上・二三・在原行平朝臣・題しらず)の後、私家集では、『索性集』『躬恒集』『兼輔集』『延喜御集』に各一首あるほか、『貫之集』に一二首集中して見られる。そして、惠慶と同時代の例としては、能宣に二首、兼盛・順・重之らに各一首ある程度で、惠慶のように、一連の歌群中に二回用いた例はない。惠慶が貫之の歌からこの語法を積極的に取り入れた可能性がある。

一一〇

【本文】

よるのあらし

もみちゆへみやまほとりにやと、りてよるのあらしにしつこ、ろなし

【校異】 ○もみちゆへーもみちゆゑ(書流) ○やと、りてーやとりして(書流)

【通釈】

夜の嵐

紅葉のために、奥深い山のほとりに宿を取って、夜の嵐に(紅葉を散らしはしないかと)心が落ち着かない。

【語釈】 ○みやま 深山。奥深い山。「外山」「端山」の対。「み山には松の雪だにきえなくに宮こはのべのわかなつみけり」(古今集・春上・一九)、「霰ふるみ山のさとのわびしきはきてたはやすくとふ人ぞなき」(後撰集・冬・四六九)。「みやまほとり」の例は『新編国歌大観』には

他にない。○しつこころ(しづこころ) 静心。静かな心。多く「なし」などの打消の語を伴って用いられる。

【別出】

『万代和歌集』卷第十四雜一、二九二六番

(題不知)

惠慶法師

もみぢゆゑみやまほとりにやどりしてよはのあらしにものをこそおもへ

【考察】

「よるのあらし」という歌題は、『惠慶集』にも、「九月五日あるところのもみちあはせするに人くよみはへり その題に」(惠慶集・九九)という歌群中に見える。ただし、この語句がそのまま和歌に用いられるのは、『新編国歌大観』を検しても、惠慶以後の用例のみである。

春の桜と同様、秋の紅葉が散らないかと心を乱すという歌は、数多い。「もみちゆゑ」という句には、「をしめどもつひにちりぬるもみちゆゑふかぬ風にもものをこそおもへ」(躬恒集・一五五)という先行例があり、惠慶と同時代の順にも、「紅葉ゆゑ家もわすれて暮すかなかへらば色やうすくなるとて」(順集・二九一・秋の野に色色のはなもみぢ散りまがふ、はやしのもとにあそぶ人々あり、たかすゑたるもあり)という歌がある。また、「ちりまがふあらしの山のもみぢゆゑこころつくさぬときのなきかな」(小大君集・一六〇)のように、嵐(嵐の山)と取り合わせて、紅葉の散るのを惜しむ心を表現することもある。また、紅葉を見るために、わざわざ宿を取る、宿するという表現も多い。

「やどとる」という語句の例は、同じ惠慶の「いまよりはもみぢのもとにやどとらじをしむにたびのひかずへぬべし」(拾遺抄・秋・

一三一・惠京法し・二条右大臣のあはたの山庄の障子のゑにたび人のもみぢ有るところにやどりたるかた有るに」という例のほか、「我が袖はやどとるむしもなかりしをあやしくてふのかよはざるらん」（宇津保物語・藤はらの君・三九・兵部卿の宮）が、同時代の用例として見いだせるのみである。ただし、『拾遺抄』の惠慶歌の「やどとらじ」に対して、『拾遺集』の本文では「やどりせじ」（秋・二〇四）になっており、この異同のあり方は、当該歌の底本と書陵部流布本とのそれに一致する。

「しづこころなし」という語句は、「久方のひかりのどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ」（古今集・春下・八四・きのともり・桜の花のちるをよめる）をはじめ、「ことならばさかずやはあらぬさくら花見の我さへにしづ心なし」（古今集・春歌下・八二・つらゆき・さくらの花のちりけるをよみける）、「桜花匂ふをみつつかへるにはしづこころなき物にぞ有りける」（兼輔集・一一・いそぐことありてさいだちてかへるに、かのおとどのみなせどのの花おもしろければつけておくる）など、春の桜花が散るのを惜しむ心情を表すが、秋の紅葉についても、「もみぢばのかぜのまにまにちるときはみる人さへぞしづこころなき」（躬恒集・三三八）という例がある。

なお、『安法法師集』にはこの歌題と一致するものはない。

一一一

【本文】

ねさめのしか

人すまずとなりたえたるやまさとにねさめのしかのこゑのみぞする

【校異】○人すまず―人もこす（書流） ○となりたえたる―となりたえ

わたる（「わ」ミセケチ）（書流） ○やまさとに―山ざとに（書流）

【語釈】○ねさめのしか（ねさめのしか） 夜中、ふと目を覚ました時に聞こえてくる鹿の声の意。この題は、管見では他に見えないが、『安法法師集』に同時詠がある（↓「考察」参照）。 ○となり 隣家。隣接の場所。 ○やまさと（やまざと） 山の中の家。山家。 ○ねさめ（ねさめ） 眠りの途中で目を覚ますこと。

【通釈】

寝覚めの鹿

人がすまず隣家が絶えた山家で、寝覚めすると鹿の声だけがする。

【別出】

『万代和歌集』卷第十六、雑歌三、三一四七番

題しらず

惠慶法師

人もこずとなりたえたるやまさとにねさめのしかのこゑのみぞする

【考察】

山里で寝覚めして聞く鹿の風情は、早くに、「山ざとはあきこそことにかなしけれしかのなくねにめをさましつ」（是貞親王家歌合・二八）、「山ざとは秋こそものはかなしけれねさめねさめにしかはなきつ」（同・二九）がある。前者は、後に『古今集』に採られることになるが、『古今集』において、この歌の直後に配列されるのは、「おく山に紅葉ふみわけなく鹿のこゑきく時ぞ秋は悲しき」（古今集・秋上・二一五・よみ人しらず）であった。これ以後、鹿の声を聞いて秋の悲しさを感じるものが定型化され、先に挙げた安法の歌や惠慶の当該歌、また（惠慶百首）中の「秋の夜のねさめがちなる山ざとはまくらつどへにしかのみぞなく」（惠慶集・秋・二二四）などの歌を生み出す土壌となった。

さらに「寢覚」と「鹿」とを詠んだ歌には、「しかなくにねざめても
のを思ふ身はきくにつけてぞつまもこひしき」(大武高遠集・一三七・
鹿をきく)、「ねざめてひさしくなりぬあきの夜はあけやしぬらんしか
ぞなくなる」(道濟集・二一〇・秋のねざめ)、「こよひしもねざめがちに
てあさばらけをのへのしかに秋をしりぬる」(道濟集・一五七・早秋十
首)、「しかのねぞねざめのとこにかよふなるをのくさぶしつゆやおく
らん」(家経集・九六・鹿、後拾遺集・秋上・二九一)がある。ただし、
「寢覚」と「鹿」を組み合わせた題の歌は、惠慶以後、「こころをばつく
しなはてそしかのねよ秋のねざめはこよひのみかは」(寂蓮結題百首・
四四・ねざめにしかをきく)、「山里のあはれいかにと人とはばねざめの
鹿のこゑをかたらん」(拾玉集・詠百首倭歌・八四五・寢覚聞鹿)、「我
のみとしかやなくらんながき夜にたれもねざめておつるなみだを」(和
漢兼作集・秋中・七四六・藤原光朝朝臣・寢覚鹿)というように、寂蓮、
慈円などに散見される程度である。

さて、結句の「……のみぞする」の早い用例として、鳴く浜千鳥を詠
んだ興風の二首、「霜のうへにあとふみとむるはまちどりゆくへもなし
となきのみぞする」(興風集・三九)、「しほのよるあとふみとむるはま
ちどりゆくへもなしとなきのみぞする」(同・六二)があり、貫之の歌
にも「大空はくもらざりけり神無月時雨心ちはわれのみぞする」(貫之集・
卷五・恋・六一一、拾遺集・恋一・六五一)がある。また、「こゑのみぞ
する」の例としては、「みわたせばいまはもえぎもみどりにてなどみほ
どりのこゑのみぞする」(海人手古良集・夏・一二)、「こぬ人をいまや
いまやと夜もすがらまつ庭鳥の声のみぞする」(古今六帖・第二・にわ
とり・一三五七)がある。

なお、同時詠と見られる安法法師の歌は、「紅葉ふるこの下かぜに夢
さめてうらなき鹿の音をもきくかな」(安法法師集・三一・ねざめにし
かのなくをききて)である。直前の三〇番歌に引き続き、紅葉を詠んで
いる点、惠慶の当該歌と異なる。

一一二

【本文】

きしのほとりのきく

きしちかくのこれるきくはしもなへてなみをさへこそしのくへらなれ

【校異】○しもなへて―しもならて(書流) ○しのくへらなれ―しのく
へらなる(書流)

【語釈】○しもなへて(しもなえで) 霜萎えしないで、の意と解釈した。
ただし、「しもなゆ」という語は未確認。なお、『注釈』は「しもならで」
の本文を採る。○へらなれ(べらなれ) ↓一〇九番参照。

【通釈】

岸のほとりの菊

岸近くに残っている菊は、霜に遭っても萎えないで波までも凌いだよう
だ。

【別出】なし

【考察】

「菊」を詠む歌は、早くに『寛平御時菊合』の二十首がある。このう
ち四首が『古今集』秋下に採られ、十三首(二六八―二八〇番)ある菊
の歌群に含まれている。その中に、「ひともどと思ひしきくをおほさは
の池のそこにもたれかうゑけむ」(古今集・秋下・二七五・とものり・

おほさはの池のかたにきくうゑたるをよめる)のような歌があるところを見ると、水辺の菊は、歌に詠まれる題材として、ある程度定着していたと推察される。用例は他にも、「なみとのみうちこそみゆれすみのえのきしにのこれるしらぎくのはな」(内裏菊合〈延喜十三年〉・四・是則)がある。

また、菊を霜とともに詠んだ歌は、「心あてにをらばやをらむはつしものおきまどはせる白菊の花」(古今集・秋下・二七七・凡河内みつね・しらぎくの花をよめる)が人口に膾炙しているが、そのほか、「霜のうへにのこれるきくのいろふかくをしむ心はなにならなくに」(醍醐御時菊合・三・いばのみこ)などがある。

「きしのほとりのきく」という題は、恵慶より先行するものを見いだせない。だが、やや時代は下るが、和泉式部の歌に、「きしの上の菊はこのれど人の身はおくれさきだつ程だにぞへぬ」(和泉式部集・三二六〇)があり、その題が「岸にのこるきく」である。さらに後世、『万寿元年高陽院行幸和歌』(二〇二四年)の仮名序の中には、「きしのきくひさしくにほふといふ事をだいにて」という記述が見える。なお、歌題ではないが、恵慶と交友関係が認められる元輔の歌に、「きむたうの朝臣、つばさかにまうでて侍りしみに、きくの花きしづらにさきて侍りしかば」(元輔集・一六六)という詞書がある。

「……さへこそ」は、『新編国歌大観』を検すると、一四〇例程度が見いだせる。当該歌のように第四句末に位置する例が多く、結句を已然形で結ぶという点で、共通するつくりの歌になる。「かはかみにしぐれのみふるあじろぎはもみぢさへこそおちまさりけれ」(西本願寺本躬恒集・七)、「鶯のきあつなけば春雨にこのめさへこそぬれてみえけれ」(貫

之集・卷三・二九九)などの用例がある。

一〇九番歌(考察)で触れたが、『恵慶集』には、結句を「……べらなれ」とする歌がこの歌を含めて三首見いだせる。だが、当該歌のように、「さへこそ」の結びに「べらなれ」を用いた歌は、貫之その他にも見いだせない。

なお、安法法師集には、これと同時詠と見られる歌は収められていない。

一一三

【本文】

水とりのなみにあそぶを

見る人もおきのあらなみうとけれとわさとなれるをしかたつかも

【校異】 ○水とりの―みつとり(書流) ○あそぶを―あそふ(書流)

○見る人も―みる人も(書古) みる人は(書流) ○おきの―おきつ(書流)

○をしかたつかも―をしかかへかん(書流)

【通釈】

水鳥が波に戯れているのを

見る人も、沖の荒波には疎遠であるけれど、わざわざその荒波になじんで漂っている鴛か鶴だなあ。

【語釈】 ○水とりのなみにあそぶを(水どりのなみにあそぶを) 水鳥が

波に戯れているのを見て詠んだ歌。『注釈』は、詞書の記し方から、当該歌以降が、題詠ではなく、実際に目にした風景を詠んだものかと指摘する。 ○あらなみ 荒れ立つ波。 ○うとけれと(うとけれど) 「うとし」は、疎遠だ、関係が薄い意。ここでは、「見る人」と沖に立つ

荒波との距離感を表す。○をしかたつかも(をしかたづかも)「鴛か鶴かも」か。「鴛」はガンカモ科の水鳥。ただし、書陵部流布本では「をしたかへかん」とあり、「鴛」と「たかべ」が読み取れる。「たかべ」は『新撰字鏡』『和名類聚抄』に見える小鴨の異名。さらに終助詞「かん(かも)」は「鴨」を響かせる。詳しくは〔考察〕参照。

【別出】

『夫木和歌抄』卷第十七冬部二、七〇二六番

(水鳥)

家集

惠慶法師

見る人はおきつあら波うとけれどわざとなれるをしたかへかな

この歌は、あふみにひらといふ所に人人まかりて題共出して歌よみけるに、水鳥のなみにあそびけるを題にてよみけると
(二二云)

【考察】

第二句「おきのあらなみ」は、『新編国歌大観』によっても、他例を見出すことができない。書陵部流布本の本文、「おきつあらなみ」でも、江戸期の一例のみである。一般によく用いられる「おきつしらなみ」をもとにした惠慶の造語であるかもしれない。

「あらなみ」の用例は、早く『万葉集』に、「荒波に寄り来る玉を枕に置き我ここにありと誰か告げけむ」(万葉集・卷二・二二六・二二六・丹比真人(名闕)柿本朝臣人麿の意を擬て、報ふる歌一首)という歌が見え、惠慶とほぼ同時代にも、「あらいそにあらなみたちであるるよもきみがねはだはなつかしきかな」(好忠集・三五五・十二月中)、「あらなみのまがきのしまに立ちよればあまこそつねにたれととがむれ」(重之

集・三一〇・恋十)、「あら波のかけくる岸のとほればかざまにけふぞふなわたりする」(兼盛集・一四六・はまに男女見わたせり)、「あら波のうちよらぬまに住の江のきしの松かけいかにしてみん」(赤染衛門集・五九・さがなき人思ひかけけりとさくに、やがていへり)といった歌が挙げられる。中でも、惠慶との交友が認められる好忠・重之・兼盛の作があることには、留意しておきたい。また、兼盛歌は、「屏風のゑに」(一四一)という詞書をもつ一連の歌群中の一首である。すると当時、「あらなみ」が、屏風絵の図柄として、ある程度定着していたと推察されよう。

第三句「うとけれど」の例は、「山もとのみぢのあるじうとけれどつゆも時雨もほどは見えけり」(続後撰集・秋下・四三三・前中納言定家・建保三年内大臣家の百首歌に、遠村紅葉)という歌がかるうじて挙げられるが、中世以前の用例は、『新編国歌大観』によっても、惠慶の当該歌以外見出せない。

結句「をしかたつかも」については、南里一郎「『をしかたつかも』小考―『惠慶集』一―三番をめぐって―」(『純真紀要』第三十九号、一九九八年十二月)に詳しい。当該句は、「をしかたつかも」という本文では、意味が通りにくい。そこで、「をしたかへかん」(書陵部流布本)という異文を検討すると、「たかへ」は、『万葉集』に「高山に高部(タカベ)さ渡りたかたかにわが待つきみを待ち出でむかも」(万葉集・卷十一・二八〇・四・二八一五)に見える、小鴨を指すと見られる。また、「をし」と「たかべ」は、同じく『万葉集』に、「人こがずあらくもしるしかづきする鸞与高部共(ヲシトタカベト)ふねのうへにすむ」(万葉集・卷三・二五八・二六〇)というように、同時に詠まれることもある。さら

に風俗歌には、「鴛鴦^{せし} たかべ 鴨さへ来居る はらの池の や 玉藻
はま根な刈りそ や 生ひも継ぐがに や 生ひも継ぐがに」(風俗歌・
鴛鴦)という例があり、「鴛鴦 たかべ 鴨」が列挙される。これは、
結句の終助詞「かも(ん)」に「鴨」を響かせていると見る根拠となる。
従って、当該歌の結句は、書陵部流布本が元来の本文であると推定され
るのである。

なお、前掲の『万葉集』二五八(二六〇)番歌の直前には、「あもり
つく 天の香具山 霞立つ 春に至れば 松風に 池波立ちて 桜花
木のくれしげに 沖辺には 鴨つま呼ばひ 辺つへに あぢむら騒き
もしきの 大宮人の まかり出て 遊ぶ舟には 梶棹も なくてさぶ
しも 漕ぐ人なしに」(万葉集・卷三・二五七・二五九・鴨君足人香具山
歌一首并短歌)という長歌がある。この「沖辺」の「鴨」のイメージは、
恵慶の当該歌にも通底するものがあるろう。

なお、『安法法師集』所載歌群には、当該歌に共通する題の歌は見当
たらない。

一一四

【本文】

はつゆきのみねなるを見て

こほりたにまた山みつにむすはねとひらのたかねはゆきふりにけり

【校異】○みねなるをーみねを(書流) ○見てーみて(書古)(書流)

○山みつーやまかは(書流) ○ひらのたかねー人のかきね(書流)

【通釈】

初雪が峰に積もっているのを見て

水さえもまだ山水に張っていないけれど、比良の高嶺は、雪が降ったの
だった。

【語釈】○こほりたに(こほりだに)「だに」は、打消表現を伴って、
述語の表す状態に対して、逆接的な事態であることを示す。……でさえ。
……さえも。○山みつ(山みづ) 山中を流れる水。○むすはねと(む
すばねど)「むすぶ」は、固まる、凝結する意。○ひらのたかね 近
江国の歌枕。琵琶湖の西岸とほぼ平行する連山。冬は北西の強い季節風
が吹き、降雪も多い(↓一〇九番「語釈」「ひら」参照)。

【別出】

『新統古今和歌集』卷第六、冬歌、六八九番

題しらす

恵慶法師

氷だにまだ山水にむすばねどひらのたかねは雪ふりにけり

『万代和歌集』卷第六、冬歌、一四五七番

題不知

恵慶法師

こほりだにまだやまみづにむすばねどひらのたかねは雪ふりにけり

【考察】

初句「こほりだに」の用例としてまず挙げられるのは、「氷だにとま
らぬ春の谷風にまだうちとけぬ鶯の声」(拾遺集・春・六・源順・天曆
御時歌合に)であろう。後に『金葉集』(三奏本)や『新撰朗詠集』『袋
草紙』などにも採られる歌である。この順歌は、暖かい春の谷風のもと、
「とけそうな」氷と「打ち解けない」鶯の声とを対比させる。恵慶の当
該歌は、比良山を見て、まだ山間を流れる水は凍っていないのに、頂に
は早くも初雪が降ったことに気付いた歌である。

「山みづ」と「むすぶ」という語句を詠み込んだ恵慶以前の例は、「や

ま水をてにむすびてもこころみぬるくはいしのなかもたのまじ」（伊勢集・四三八）が挙げられるが、この歌の「むすぶ」は、言うまでもなく「掬ぶ」（手のひらで水をすくい汲む）であり、惠慶の当該歌の「結ぶ」（凝結する）とは異なる。「山みづ」が「結ぶ」と組み合わせられる例は珍しく、「掬ぶ」のほうが一般的である。『注釈』では、「氷こそ今はすらしもみよしの山のたきつせこそ多もきこえず」（後撰集・冬・四七七）を念頭に置いた詠と見る。

第二句の「山みづ」は、書陵部流布本において「やまかは」になっている。「やまかは」と「むすぶ」が同時に詠まれている歌は、惠慶と同時代にも、「山川のいををこほりのとぢたるはかせこそあみとふきむすびけれ」（保憲女集・一二五）がある。

「ひらのたかね」の用例は、惠慶と同時代には意外と少ない。「みわたせばひらのたかねにゆききえてわかなつむべくのはなりにけり」（麗景殿女御歌合・一一・兼盛・若菜）は、惠慶の当該歌が冬歌であるのに対し、春歌である。

ところで、「ひらのたかね」は、書陵部流布本では「人のかきね」になっている。「ふたばよりのたのみしものをみなへし人のかきねにおひにけるかな」（敦忠集・二四・いかでとおもひける人のこと人さだまりたるにをみなへしにつけて）や、「山城の駒のわたりを見てしかなうりつくりけん人のかきねを」（兼盛集・六……いとをかしげなるこうりをつつみていだしたりしかば）、また、その異伝と思われる「山しろのとばにかよひて見てしかなうりつくりける人のかきねを」（小大君集・八三……まへなるたちぶといふうりを、きなるしきしにつつみて、おきなに、これたてまつれとてとらせたりければ、くらづかさにつきて、

そこよりいふ）といった歌が、用例として挙げられる。「人のかきね」の異文が生じた背景には、惠慶とほぼ同時代のこのような用例の存在が指摘できるだろう。

なお、本歌群と同じ時に詠まれたと思われる『安法法師集』所載歌群において、当該歌と同じく比良山を詠んだ歌としては、「ちはやぶるひらのみやまのみぢ葉にゆふかけわたすけさのしら雲」（安法法師集・二八・ひらにいきてつけるほどに、山に白雲のかかりたりけるをみて）が挙げられる。惠慶歌と安法歌は、いずれも山に白いものを見いだしているが、「雪」と「雲」との違いがある。

一一五

【本文】

つなてひくふねを見て

よとみなくなみちにかよふあまふねはいつこをやと、さしてゆくらん

【校異】 ○見て―みて（書古） ○あまふね―あま舟（書流） ○いつこ

―いとこ（書流） ○ゆくらん―ゆくらむ（書流）

【語釈】 ○つなて（つなで） 船につないで引く綱。曳航したり、川をさかのぼるとき陸上から引いたりするのに用いる。 ○なみち（なみぢ）

海上の船の通う路。海路。多く歌に用いる。 ○かよふ ある場所を行き来する。繰り返して往来する。 ○あまふね（あまぶね） 海人の舟。

漁舟。『万葉集』以来多用されている語であり、惠慶もよく用いる。

○やと（やど） 一時、泊まる所。停泊地。 ○さして その方へ向かって。目的地へ向けて。

【通釈】

綱手を引く船を見て

行きよどむことなく海路を行き来する漁舟は、いったいどこを停泊地と目指して行くのだろうか。

【別出】なし

【考察】

「世中はいづれかさしてわがならむ行きとまるをぞやどとさだむる」(古今集・雑下・九八七・よみ人しらず・題しらず)の発想を借り、漁舟がどこも知れぬ「やど」を目指して行くさまに、海に生活の糧を求める人々、ひいては自分自身の人生の行方の不安定さを重ねた歌である。

初句「よどみなく」の用例は少なく、管見に入るのは、「よどみなくなみだのかははながるれどおもひぞむねをやくとこがるる」(成尋阿闍梨母集・七六)のほか、江戸期の一首のみである。恵慶歌は、漁舟が滞ることなく海路を往復しているイメージで詠まれている。

「なみぢ」に「かよふ」という表現の類例としては、「……はるはいつとも しらなみの なみぢにいたく ゆきかよひ ゆもとりあへず なりにける 舟のわれをし きみしらば あはれいまだに しづめじとあまのつりなは うちはへて ひくとしきかば 物はおもはじ」(拾遺集・雑下・五七一・源したがふ・身のしづみけることをなげきて、勘解由判官にて)が挙げられる。「舟」に「われ」が重ねられている点に注意したい。

結句「さしてゆくらん」の用例に、「いづかたをさしてゆくらんおぼつかなはるかに見ゆるあまのつりぶね」(道信集・四二・屏風のゑに、はるかにみゆるあまのつり舟を)がある。漁舟を詠む点でも当該歌と共

通するが、恵慶歌と比較してより遠くに釣舟を望む。

なお、同じ時の詠と思われる安法法師の歌に、「しら浪ののどけからねばしづのをのつなでいそげるふねもゆきかふ」(安法法師集・二九・つなでひきつつゆくをみて)がある。数ある漁舟が盛んに行き来する様子が見て取れよう。また、この安法法師の歌の「つなで」の語は、恵慶の当該歌では、詞書にあるのみで和歌には用いられないが、「みちのくはいづくはあれどしほがまの浦こぐ舟のつなでかなしも」(古今集・東歌・一〇八八・みちのくうた)に通じる情感を、恵慶歌からも読み取ってよいように思われる。

一一六

【本文】

なみのこゑをきく

いそふりにさはくなみたにたかけれはみねのこの葉もいまはのこらし

【校異】 ○きくーきゝゝて(書流) ○さはくーさわく(書流) ○この葉

—このは(書流) ○いまーけふ(書流) ○のこらしーとまらし(書流)

【語釈】 ○こゑ 事物の発する音。響き。 ○いそふり 磯に打ち寄せる荒波。「つねに速き浪ありて石を崩す。国人名づけて伊曾布利(いそふり)と名づく。石を振るをいふなり」(相模国風土記・逸文)。だが、当該歌の「いそふりにさはくなみ」では、いささか解釈しにくい。ここは、「いそふりに」で「磯ふりの波のように」の意と見た。 ○さはく(さわぐ) 火影や水面が激しく揺れ動く。 ○たかけれは(たかければ) 「波が高い」といえば、視覚による表現と考えられるが、当該歌の場合、そうすると、聴覚に基づく「なみのこゑをきく」という題から離れてし

まう。あるいは、題に従って「波音が高い」と解釈する可能性もあるが、ここでは、波の高さを音から想像したものと見る。

【通釈】

波の響きを聞く

磯ふりの波のように激しく揺れ動く波さえ高いので、峰の木の葉も、今は残っていないだろう。

【別出】なし

【考察】

耳にした「さわぐなみ」の音から、波の高さ、ひいては風の激しさを想像し、峰の木々の落葉を推定する。高嶺を越えてくる比良おろしをまともに受ける、琵琶湖近辺の地形の特色がよく表れている詠である。

初句「いそふり」の和歌における先行例は、「いそふりのよするいそにはとしつきをいつともわかぬゆきのみぞふる」(土左日記・一月十八日・二二・あるひと)が挙げられる。『惠慶集』に、「貫之か土左の日記かきたる……」(惠慶集・一八二)という詞書があることから推しても、『土左日記』からの語彙摂取の可能性を想定してよさそうに思われる。

「さわぐなみ」は「いかなれば千ひろのふねもかかるらん風のさきにもさわぐなみかな」(古今六帖・第五・名ををしむ・三〇五九)のように、「風」とともに用いられる例がある。また、「なみのこゑ」を詞書にもつものに、「なみのこゑにゆめさむといふ題を、ためきよとむねちかとによませて……」(重之集・一二七)、「天王寺にて浪の声をききて」(安法法師集・八六)がある。『注釈』が指摘するように、近藤みゆき氏「平安中期河原院文化圏に関する一考察―曾祢好忠・惠慶・源道済の漢詩文受容を中心に―」(『千葉大学教養部研究報告』A・22、平成二年三月。後に、

『古代後期和歌文学の研究』風間書房、平成十七年二月所収)には、「なみのこゑ」は、床の中で耳を澄まして聞く波音をいう漢詩文の表現に拠るか指摘されている。

なお、『安法法師集』にはこの歌題と一致するものはない。

一一七

【本文】

風のをとの、夜たかきをき、て

ひらの山もみちはよのまいかならんみねのうは風うちしきりふく

【校異】○風―かせ(書流) ○夜―ナシ(書流) ○山―やま(書流)

○もみちは―もみち(書流) ○よのま―よのまは(書流) ○いかならん―いかならむ(書流) ○うは風―むらかせ(書流)

【通釈】

風の音が、夜は大きいのを聞いて

比良山の紅葉は夜中にどうなっているだろう。峰の上を風がしきりに吹く。

【語釈】○ひらの山 近江国の歌枕。琵琶湖の西にあり、武奈ヶ岳などの連山。この山脈から琵琶湖岸に吹き降ろす風を比良おろしと呼ぶ。『万葉集』に「ささなみのひらやまかせのうみふけばつりするあまのそでかへるみゆ」(万葉集・巻九・一七一五・一七一九・槐本歌一首)があるが、平安朝には歌に詠まれることはあまり多くない(↓「考察」参照)。勅撰集に見えるのは『千載集』以降。○よのま 夜中。夜間に吹く風には、「あさまだきおきてぞみつるむめの花よのまの風のうしろめたさに」(拾遺抄・春・一四・読人不知・題不知)といった、梅花が散るのを心配す

る歌もある。○いかならん どうなっているか、実際に見えないものを推測する。紅葉が風に散ってしまったのではないかと心配する「けふをらぬ人もさそはぬもみぢ葉によのまふきく山おろしの風」(西本願寺本中務集・四二・まき・ののみちを見る)は、当該歌と類似の状況である。○みねのうは風 「うは風」は上風で、峰の上を吹く風。比良山上は強い風が吹く。○うちしきり 頻繁に。

【別出】

『万代和歌集』巻第六、冬、一三三九番

(題不知)

惠慶法師

ひらのやまもみぢはよのまいかならむみねのむらかぜうちしきりふく

『夫木和歌抄』巻第十九、雑部一、七七九六番

村風

聞風音高

惠慶法師

比良の山紅葉夜のまはいかならんみねのむらかぜうちしきりふく

『高良玉垂宮神秘書紙背和歌』一二五番

惠慶集

ひらのやまもみぢはよのまちりぬらむみねのむらかぜうちしきりふく

『三百六十首和歌』二九一番

(十月上旬)

惠慶

比良の山夜の間の丹葉いかならん嶺の秋かぜうちしきりふく

【考察】

書陵部流布本をはじめとして、『万代集』『夫木抄』『高良玉垂宮神秘

書紙背和歌』の惠慶歌はいずれも「むらかぜ」、『三百六十首和歌』は「秋かぜ」で、「うはかぜ」としたものはない。「むらかぜ」の用例は、「きりこめてたえだえわくる月かげによはのむら風ふきかへさなむ」(大斎院御集・一一六・おなじ十九日夜、あかつきちかうなるまでながむるに、そらのけしき、風のおと、すべてすべて、きしかたゆくさきかかるとあらじとおもふにものおぼえず、いかかはせんとて、たいふ)、「絶絶にかをれる梅のほひかな夜半のむらかぜ吹きにけらしな」(夫木抄・巻十九・雑一・七七九七・光俊朝臣・宝治二年百首)など、わずかながらある。『夫木抄』は「村風」の小題を立て、惠慶歌と藤原光俊の歌の二首を置く。

比良山や比良を詠む歌は、『万葉集』にはあるが、平安時代には少なく、中世以降には再び多くなる。惠慶以前、もしくは同時代の歌には、「かくてのみわがおもふひらのやまざらば身はいたづらになりぬべらなり」(躬恒集・三三三・ひらのやま)や「見わたせばひらのたかねに雪きえてわかなつむべく野はなりにけり」(統後撰集・春上・三四・兼盛・麗景殿の女御の歌合の歌)などがある。

比良山の紅葉を詠む歌は、惠慶と同道した時の詠と見られる安法法師の歌、「ちはやぶるひらのみやまのみぢ葉にゆふかけわたすけさのしら雲」(安法法師集・二八・ひらにいきてつけるほどに、山に白雲のかりたりけるをみて)のほか、平安期には、「比良の山峰の紅葉ばとればちる時雨の雨ぞまなく降るらん」(袋草紙・下・七七八)や「ひらやまをにほはすもみぢたをりもてこよひかざしつちらばちるとも」(和歌童蒙抄・第七・秋／紅葉・六八六)などが見える程度である。

「うは風」といえば、藤原義孝が「秋はなほゆふまぐれこそただな

らねをぎのうはかせはぎのしたつゆ」(義孝集・四・あきのゆふぐれ)と詠んで以降、「荻の上風」として用いられることが多く、「しきなみはたちまさるともふきこなむ心のうちにまつのうはかせ」(相模集・五・二・心の中)や「昔おもふ池にはいひもくちはててかれ野につづく蘆の上風」(玄玉集・卷七・七・二五・寂蓮・古池寒蘆といふ心をよめる)などの例にしても、やはり植物の上を吹く風である。とすれば、惠慶歌以外管見に入らない「みねのうは風」という語句は、「峰(の上)」と「上風」とをあえて取り合わせた、惠慶による造語なのかもしれない。

一一八

【本文】

おなしたひ、よるやまこゆるに、もみちのいたうちりかゝるを

山しけみこのしたゆけはもみちはのころもそほちぬあめとこそふれ

【校異】 ○おなしたひーナシ (書流) ○よるやまーかへさにきたやまよ

り (書流) ○もみちのーもみち (書流) ○いたうーいとおほく (書流)

○ちりかゝるをーちりかゝるに (書流) ○もみちはのーもみちはも

(書流)

【通釈】

同じ旅のおり、夜に山越えをすると、紅葉がたいそう散りかかるの

を

山に木が茂っているのです、木の下を行くと、紅葉が衣の濡れない雨となつて降るよ。

【語釈】 ○おなしたひ(おなじたび) 同じ旅。一〇九―一一七番歌同様、

比良への旅。 ○よるやまこゆる 夜、山越えをする。 ○山しけみ(山

しげみ) 山の木が繁っているのです。 ○このした 木の下。 ○ころもそほちぬあめ(ころもそほちぬあめ) 「そぼつ」は、濡れるの意。「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形。衣が濡れない雨。紅葉は雨の如く散りかかるが、濡れることはない。

【別出】なし

【考察】

詞書に「同じ旅」とあるところから、一〇九―一一七番の比良を旅した折の詠であるう。惠慶と共に比良への旅をしたらしい安法の家集には、「おほぞらに木ずゑや心あはすらんしぐれとともにこのはふりしく」(安法法師集・三二・しぐれのふるに、もみちのちりまがひけるをみて)という歌があり、紅葉が頻りに散る光景としては当該歌と共通するが、安法の歌に詠まれている「しぐれ」は、惠慶歌には出てこない。

散る紅葉は、視覚的には言うまでもなく、聴覚的にも、「秋の夜に雨ときこえてふりつるは風にみだるる紅葉なりけり」(後撰集・秋下・四〇七・よみ人しらず・題しらず)というように、雨と過たれるものである。また、『注釈』では、紅葉の降るさまを雨に見立てつつ、本当の雨との違いを指摘する先行例として、「立ちとまり見てをわたらむもみぢばは雨とふるとも水はまさらじ」(古今集・秋下・三〇五・みつね)を挙げる。同じ雨でも紅葉の雨は濡れないものだという発想の歌は、惠慶と同時代には、「つゆばかりそでだもぬれず神な月もみぢは雨とふりにふれども」(好忠集・二八八・はじめの冬/十月)の例があり、その後、「もみぢばは雨とふれども空はれて袖より外はぬれずぞ有りける」(公任集・三三七・中将におはしける時冬の夜さうざうしとて歌あはせの様なる事し給うけるに)、「あめかとしてぬれじとかづくころもでにかか

るはをしむもみぢなりけり」(經衡集・四五・おつるはなあめのごとしといふ題) などがある。

「そぼちぬあめ」の用例は、他に管見に入らない。「そぼちぬ」の例も、恵慶と同時代以前には、「をみなへしそほちぬのべのあらばこそあきいたづらに君もすぐさめ」(敦忠集・一〇六・宮) が見える程度である。

附記

本試注は、筑紫平安文学会で行っている『恵慶法師集』輪読の成果であり、科学研究費補助金基盤研究(C)「文字列データ解析システムの構築と平安中期歌語生成に関する研究」(課題番号19500217、平成十九～二十一年度)における研究の一部である。用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸作成の文字列解析器「e-CSA」Ver.2.00を使用した。

